

繁殖肉用牛複合経営の成立要因と経営方式の確立に関する研究

個別経営農家の労働配分と収益性

田原孝二・窪園順一郎・石神信男

(鹿児島県畜産試験場)

1. 試験の目的

繁殖肉用牛複合経営農家における各作目毎の農作業従事時間を調査し、家族労働力を中心にした経営規模拡大の可能性と各作目間の収益性について検討し、繁殖肉用牛複合経営確立の資とする。

2. 試験研究の方法

調査農家について、農作業日誌、収支記録帳等の記録を依頼し、年間の労働配分と各作目別の収益性について調査分析した。

3. 試験成果の概要

(1) 複合経営においては、土地と労働力を作目間できかに合理的に利用するかということが重要であり、部門間の労働配分と省力化や複合作目が重要な課題となる。これらを調査農家で検討してみると、No. 1, No. 4 (園芸) 農家では、この組合せにより、年間を通して遊休労働はみられなくなったが、複合作物の季節性から、水稻の収穫期とキュウリの定植期に労働の競合がみられる。しかし、現在の作目構成と規模なら自家労働でもって調整可能であると考えられる。部門別にみると、肉用牛部門の省力化が重要な課題といえる。現在、刈取給与型であり、1日1頭当り管理時間も約37分を要しているのが今後、貯蔵飼料の確保に努め省力化することが必要である。1日1頭当り約20分程度に省力化できれば、繁殖牛10頭飼養も可能となる。No. 2 農家(キヌサヤ、ポンカン)では繁閑の差が大きく、複合作目の収穫期が一致するため、12月、1月に労働が集中し、一部雇用労働で対処しているが、1日1人当り労働時間も11.9時間となり労働競合が強くみられる。これらの収穫作業は機械化が難しく規模拡大の阻害要因となっている。肉用牛部門では、今後、労働競合を緩和するためにも、既存の放牧場2haを積極的に利用し、5～8月にかけて、サイレージなどの乾草貯蔵飼料を確保することが必要である。

No. 3 農家(温州みかん)では、みかんの収穫期とサイレージの調製時に労働の集中がみられるが、年間を通して比較的平均した労働配分である。肉用牛も16頭と多いが、労働力面で余裕がみられ、飼養技術も高水準であることから肉用牛部門は更に規模拡大されるであろう。No. 3 農家の作目構成は早期水稻、温州みかん、肉用牛であり、それぞれ作目別の労働ピークが重複せず、労働配分のうまくゆく類型である。

No. 5 (養蚕)、No. 6 (タバコ) 農家では、繁閑の差が大きく、複合作物の季節性から5～10月に労働が集中し、冬場に余剰労働がみられる。No. 7 (茶) 農家では5月のサイレージ調製時を除き年間の労働配分も平均され、肉用牛も16頭と多いが、1日1人当り労働時間も、4.6時間であり労働力面での余裕がみられ、規模拡大の可能性は大きい。

これら調査農家の1日1頭当りの家畜管理時間は20～71分の範囲にあり個別間での差が大きく、粗飼料の給与形態が肉用牛部門の省力化を大きく左右するといえる。No. 3, No. 7 農家では、貯蔵飼料のサイレージを利用し、家畜管理時間も21分と少ない。他部門との労働競合を緩和するためにも、今後、サイレージ、乾草などの貯蔵飼料を確保し、肉用牛部門の省力化をはかる必要がある。

(2) 今回の調査結果から各作目別の労働報酬(1日当)をみると園芸1,008円～1,968円、タバコは3,376円、果樹920円～1,864円、茶2,120円、養蚕1,136円、水稻888円～4,560円、肉用牛200円～7,720円であり、水稻、タバコが比較的高い収益をあげている。園芸、肉用牛部門では、個別間の差が大きく、技術水準や経験等が原因していると思われる。特に No. 3 農家の肉用牛部門は高い収益をあげている例であるが、子牛販売価格も11頭平均で342,909円と高く販売している。